

序

私が研修をはじめたころから10年以上が過ぎようとしています。私事で恐縮ですが、初期研修を市中の第一線の救急病院で行いました。そこでは救急受診で担当した患者の大部分、そして入院後の病棟担当患者の半分以上がなんらかの感染症が関わって病態を複雑にしており、日常診療のレベルアップには臨床感染症の知識が必須の状況でした。そしてそこで出会った指導医も非常に感染症に精通されており、患者ごとのチームカンファレンスでは常に感染臓器・問題となる微生物・選択すべき抗菌薬について可能な限り論理的なアプローチで治療方針を決定していくことを重視していました。

しかし、当時は青木眞先生の『レジデントのための感染症診療マニュアル』（医学書院、第1版）くらいしか日本語でレジデント向けに平易に書かれた参考書はなく、体系だって勉強するためには何度となくページが汚れるまで読み返す日々だったことを懐かしく思い出します。

それから時間の流れとともに、国内各地で開催される感染症セミナーであったり、臨床感染症の第一線に関わっている私の尊敬する感染症専門の先生方の努力もあり、年々日本国内での臨床感染症は進歩を遂げて、現在では10年前とは比べものにならないくらい充実してきたというのが実感です。

そしてそのような国内での臨床感染症の大きなうねりは医学書の世界でも同様で、今では本屋の医学書コーナーに行くとなんかさんの感染症関連の参考書が置いてあり、あまりの種類が多さにどれを選べばよいか困ってしまうほどです。

そのなかで、今回羊土社からER・救急の現場で役に立つ感染症診療の参考書編集のお話をいただきました。「どんな本だったら現場のニーズにこたえられるだろうか？」というところを考えたうえで、執筆者を国内外で若手からベテラン、そして開業医・診療所勤務医から一般市中病院・大学病院勤務医の方々を大胆にも一般公募し、さらに私なりにセレクションする形で選ばせていただきました（以前から存じ上げていた方も、今回はじめて知った方も混ざっており、そのような方々の原稿をもとに編集作業を進めることは非常にエキサイティングでした）。そのため内容は多岐にわたり、また多くの人たちがさまざまな視点から原稿執筆されたこともあり全体を統一することに非常に時間がかかりましたが、ついに完成しました。

この本が成功したかどうかは、最終的には読者のみなさまの判断によると思いますが、編集者としては自信作となったと自負しています。

最後になりますが、このプロジェクトに参加していただいた執筆者の方々には多くの修正・訂正・書き直しを私自身お願いし、非常に時間も体力も労を取られたことと思われます。本当にありがとうございました。

2012年10月

いつものICU奥の部屋にて
大野博司